児童英語の語彙リスト
ー『KUIS 語彙リスト 500』の開発過程とその全容ー*

長谷川 信子・町田 なほみ
神田外語大学

本稿は、2011 年から公立小学校で正課として導入される英語活動に活用可能な子ども用英語語彙リストの開発過程とその特徴を報告する。まず、先行研究を概観し、子どもの言語発達の観点から語彙習得の重要性を指摘した上で、町田他（2008）にて報告された「KUIS 語彙リスト」の開発過程の概略を述べる。本論文では、その 2008 年版リストを改訂し、より汎用性が高く、教育現場での活用を視野に入れた『KUIS 語彙リスト 500』の開発過程を報告し、そのリストに含まれる情報などを詳細に紹介する。

1. はじめに

文部科学省は、2011 年から公立小学校の高学年（5、6 年生）を対象に外国語活動（週 1 時間）を正課とすることを、2008 年 3 月に新『小学校学習指導要領』（以下『新要領』（小学校）

---

* 本稿は、平成 16 年 12 月～平成 21 年 11 月の 5 年間にわたる（独）科学技術振興機構 社会技術研究開発センター（JST）からの委託研究、研究開発プログラム「脳科学と教育」（タイプⅡ）『言語の発達・脳の成長・言語教育に関する総合的研究』（研究代表者：首都大学東京　萩原裕子）のサブ領域「言語学・応用言語学に基づく外国語能力の検査、判定、評価法の開発」として神田外語大学（研究機関代表者：長谷川信子）で進められてきた研究の一部である。本稿は、以下の第 3 節で提示されている内容を含め、町田他(2008)を基盤に発展させた研究である。前稿の共著者であった小林美代子先生（平成 21 年 10 月より熊本大学）には深くお礼申し上げる。また、本稿と「児童英語の語彙」という共通の課題で共同研究（その成果として神谷他(2009, 2010)）を遂行している神谷昇氏、長谷部郁子氏との討議に負うところも大きい。当然のことながら、本稿についての責任は筆者らにある。

とする）により告示し、実質は外国語としての「英語」の必修化を、これまでの中学校での導入より、2 年早める決定をした。その方向性と活動内容や指導方法の指針として、2008年には『英語ノート（試作版）』5 年生用・6 年生用を、2009年には『英語ノート』1、2 をその指導資料と共に、全国の公立小学校に配布した。文科省の「外国語活動」（実質は、「英語活動」であるため、以下では「英語活動」と述べる）の位置づけは、「正課」であるが、「教科」ではないため、『新要領』（小学校）にも、その具体的内容については、中学校の英語について新『中学校学習指導要領』（以下『新要領』（中学校）とする。）が記述しているような語彙やその数、文法項目についての指定は一切述べられていない。しかし、『英語ノート』は教科書ではないとはいえ、文科省が発行していることを考慮すれば、その使用は義務的ではなくとも、一応の指針となるであろうことは容易に想像がつく。しかし、そこで導入される語彙や表現が、どのように選択されたかについての体系的な説明が与えられていないこともあり、『英語ノート』配布以前から英語活動（もしくは英語教育）を実践している多くの（私立、公立を問わず）小学校や民間の英語教室などでは、独自に開発・採用してきた教材と『英語ノート』との相違や関連を系統立てて把握することも叶わず、今後の「英語活動」の内容や方向について苦慮していることであろう。

また、小学校での「英語活動」が必修化されるということは、日本における英語教育の始まりが、中学校ではなく小学校高学年に移行することを意味するが、小学校での「英語活動で得られる英語」がどの程度「中学校以降の英語」と関わるのかについては、『新要領』（小学校）にも『英語ノート』（指導資料を含む）にも、具体的な記述はない。英語教育の目的に明示されているのは、中学校英語では、「読むことと書くこと」に加え、「英語の知識」の導入が含まれるのに対し、

小学校英語では「英語に触れる」に留めること程度である[1]。そうしたことから、『新要領』（小学校、中学校）の公示(2008年)以降、小学校英語教育と関わる学会（例えば、小学校英語教育学会（JES））や雑誌（例えば、『英語教育』大修館書店）、書籍で、小学校英語教育のあり方と中学校英語との関係などが、しばしば討議されている[2]。しかし、管見では、それらの討議の多くは、（『学習指導要領』の記述から考えれば無理のないことだが）概念的・観念的なものが多く、具体的な言語資料に基づいた上での明確な指摘は皆無に等しい。

だが、中学校（以降）で行われてきた英語教育の内容を踏まえ、児童英語関連のテキストや教材（『英語ノート』およびその他の児童英語テキスト）を言語学の視点をもって考察するなら、児童英語で導入される「英語のカタチ」が見えてくるのである。その観点から、神田外語大学言語科学研究センターでは、2004年以降、本稿が一部としている研究を含めた「早期英語教育プロジェクト」（以下、「早期英語プロジェクト」）を立ち上げた[3]。そこでは、以下でも述べるが、児童英

---

[1] より具体的には、『新要領』（小学校）では、その目標は、「外国語を通じて、1）言語や文化について体験的に理解を深め、2）積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、3）外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことであり、『新要領』（中学校）では、「外国語を通じて、1）言語や文化に対する理解を深め、2）積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。3）聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」こととある（下線は筆者）。表現の明らかな違い（下線部分）が、小学校と中学校の英語の「概念的」な違いだが、それらが、具体的に「英語」のどんな部分に表れるのかは（「読むこと」と「書くこと」が中学校英語では含まれること以外は）明確ではない。

[2] それらを列挙することはここではしないが、『英語教育』2009年5月号などはその代表例である。しかし、管見では、それらの討議の多くは、概念的・観念的なものが多く、具体的な言語資料に基づいた上での明確な指摘は皆無に等しい。その例外とも言えるのが、神田外語大学言語科学研究センターにおける「児童英語」と関わる一連の研究（注3参照）で、本稿および神谷他（2009、2010）では、児童英語（『英語ノート』およびその他の児童英語テキスト）の語彙の観点から、中学校英語（およびそれ以降）との相違、関連を探っている。長谷川（2010）も参照されたい。

[3] そのプロジェクトの中心部分が、本稿と関わる上記注（*）に記載した研究であるが、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)『早期英語教育の指導者養成及び研修の

語（および、言語教育一般）における語彙の重要性に鑑み、その語彙を中学校英語（およびそれ以降）、成人（日本での英語学習者、英語母国語話者）の語彙との相違、関連を探ってきた（注2参照）。本稿は、そうした研究の基盤となり、また、今後の児童英語（および、中学校以降の英語）の教育や研究に具体的な資料となる「児童英語関連の語彙リスト」の開発過程（「KUIS語彙リスト」、および「KUIS 語彙リスト 500」）を報告することを目的としている。「基礎資料」としての性格上、この語彙リストの考察から得られる児童英語教育に関する示唆やあり方については、神谷他（2009、2010）、長谷川他（2009）、長谷川（2010）を参照されたい。

以下では、先ず、児童英語における語彙の位置づけと重要性に言及して、本研究（児童英語のための語彙リストの整備）の意義を述べ、第3節で、町田他（2008）で報告した「KUIS語彙リスト」の開発過程を概観し、そのリストと他の児童英語関連の語彙リストの違いを明確にした後、第4節以降、児童英語教育の現場で有用性が高いと思われる「KUIS 語彙リスト 500」の開発の必要性と開発過程を、その母体となった「KUIS語彙リスト」との関わりで明らかにする。

2. 児童英語における語彙の重要性

外国語の学習には、その言語の様々な要素を（意識的、無意識的に）習得することが含まれる。そうした要素には当該言語の音の体系や文法、表現法などが含まれるが、語彙の習得が大きな意味をなす（かつ、大きな比重を占める）ことは自

実態と将来像に関する総合的研究』（2004-2006年度、課題番号16320075; 研究代表者、小林美代子）、同補助金基盤研究（B）『早期英語教育指導者の養成と研修に関する総合的研究』（2007-2009年度、課題番号19320085；研究代表者、小林美代子）、同補助金基盤研究（C）『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』（（2008-2011年度、課題番号20520552；研究代表者、神谷昇）が含まれる。

明である。実際、早期英語教育での多くの活動が、ことばの基盤となる語彙の導入に重きを置いている（Cameron, 2001; Pinter, 2006 など）ことが海外でも指摘され、成人向けの言語教育でも、語彙知識が言語力と深く関わり重要な役割を果たす（Folse, 2004; Nation, 1990; Read, 2000 など）ことは多くの先行研究により報告されている。殊に、日本での小学校での英語教育の現場（「英語活動」）にあっては、（『新要領』（注1参照）で明記されているように）文法などの「英語の知識」は導入せず、「英語に触れる」程度を目的化するならなおのこと、「外国語の導入はその言語の語彙の導入を意味する」と言っても過言ではないほどである[4]。

しかし、そうした語彙や語彙指導の重要性にも関わらず、小学校での英語活動で導入される語彙は、学校や教育プログラム、採用されるテキストにより千差万別である。これは、授業で扱う教材が異なれば、扱う話題も異なるためで、子どもが触れる語彙は、扱う教材や指導者の判断により、大きく左右される。この点は、既に先行研究でも指摘されており、Rixon (1999)では、英国で出版され国際的に普及しているコースブック7種に出現する889語を抽出し調査した結果が報告されているが、その7種のテキストのうち5種に共通する語はわずか113語（13%弱）に過ぎないとのことである[5]。

我が国においては、文科省が、上述のように、『英語ノート』を編纂・刊行し、多くの語彙（神谷他（2010）によれば約650

---

[4] 『英語ノート』を含め、児童を対象として英語のテキストには、単語（語彙）だけでなく、How are you? What time is it? What color do you like?など、文も導入される。しかし、こうした文表現も（文の構造や文要素の順番などに言及して）分析することはなく、定型表現（つまり、語彙と同様、固定表現としてそのまま覚える対象）として導入され、児童英語の分野では、文表現も語彙と同様の扱いをうけることが多い。長谷川（2007、2010）参照。

語[6])を「英語活動」において導入することを想定しているが、そうした語彙の選択の理由や体系的な位置づけは明確にされていない。『英語ノート』の配布により、「英語活動」で扱う内容に一定の方向性が出されたとも言えるが、『英語ノート』が教科書ではなく使用の義務もないこと、また、各単元で導入される語彙は『英語ノート』の「指導資料」の語彙語法で一部提示されるものの、明確な提示がないこと、などを考えると、全国の小学校で共通した語彙が指導されるとは考えにくい。

こうした導入初期における語彙のばらつきについて、どの程度の指針を与えるかは、議論の余地のあるところだが、小学校での英語活動の内容が、必然的に中学校以降の英語教育に影響を与えることを考えると、小学校でどのような語彙が導入され、それが中学校以降、および成人の語彙とどの程度重なり、どのように異なるかを明らかにすることは、意味あることであろう。

神田外語大学の言語科学研究センター（CLS）での「早期英語プロジェクト」（特に、注（*）で述べたJSTによる委託研究）では、日本における児童英語教育（小学校での「英語活動」を含む）の現場を視察・概観し、かつ様々な早期英語関連の教材を分析した結果、児童英語の「本質」（「児童英語とはどういう英語か？」に対する答）は、その活動のあり方からしても、また、『新要領』（小学校）に示された目標（注1）からしても、「語彙」の考察が最もそれを特徴的に示すであろうとの結論に達した。その結論に従い、このプロジェク

---

[5] そうした共通する語には、beやcan、inやonなどの（以下で述べるが、機能語に属するもの）や、helloやgoodbyeといった挨拶表現が含まれており、語彙習得の大半を占める「内容語」に限れば、共通語彙はさらに少ないことになる。

[6] 神谷他（2010）で提示した語彙数は言語学の観点をふまえて算出したものである。詳しくは神谷他(2010)を参照されたい。

トの研究は、次の２つを大きな柱とした。

①「語彙リスト」の構築とその考察（以下で報告；町田他（2008）、長谷川（2010）も参照）

②「児童英語の能力判定と評価」に関わる研究（小林他（2008）、小林（2010）、長谷川・町田（2010）参照）

そして、①の「語彙リストの構築と考察」は、それのみで児童英語のあり方や本質を特徴付ける証拠を提示するだけでなく、「児童英語能力」の大きな部分が「語彙力」であることから、適正な「能力判定」を行う（つまり、②の研究）ための基盤となる「語彙の集積（リスト）」の役割も担ったのである。以下で報告するのは、そうした汎用性の高い語彙リスト構築の開発過程であり、その構成に含まれる情報の詳細である[7]。

3. 「KUIS 語彙リスト」開発過程

本研究（神田外語大学 CLS での「早期英語プロジェクト」）では、前節の①、②の目的に照らした「児童英語リスト」についての調査を行ったが、その関連での先行研究で、具体的にリストが開示されているものとして、神戸大学の石川氏による KUBEE1850[8]（石川（2006））および中條他（2006）に注目した。

石川（2006）リストは、様々な観点から選定された児童の語彙とかかわる数多くの言語資料（英語の児童文学、英語圏

---

[7] ちなみに、町田他（2008）で開発過程を詳細に報告した「語彙リスト」は、②の「児童英語評価テスト」開発のための語彙リストであった。「早期英語プロジェクト」における研究の進行上、テスト用の語彙リストの開発を先行させる必要があったためである。以下では、そこで開発した語彙リストを、テスト開発だけでなく、①の「語彙リスト」開発に向け改訂し、児童英語教育の現場および研究一般に広く活用可能な汎用性の高いリストとして整備した過程を第４節にて報告する。

[8] KUBEE1850 の詳細については、神戸大学石川研究室による以下の Web ページを参照されたい。http://www11.ocn.ne.jp/~iskwshin/kubee.html

での小学校の教科書、日本の中学校の英語の教科書、小学校の日本語で書かれた教科書、日本の児童による日本語の作文、など）を用いているのが特徴的であり、これらの資料から、L1・L2 にかかわらず児童の言語活動に表出すると思われる語彙をコーパス言語学の手法を用い 160 万語以上抽出した上で、子ども用の語彙の選定を行った結果のリストである（以下、6.1.1 も参照）。つまり、実際に日本における小学校での英語活動に導入される（されている）語彙かどうかの観点ではなく、児童期の母語（英語母語話者、日本語母語話者）の語彙の観点も含め、その時期の子どもの言語活動で必要と思われる語彙という視点からのリストである。

これに対し、中條他（2006）は、日本の中学校用英語検定教科書会社 5 社から刊行されている小学生用英語活動テキストとその指導書を言語資料とし、これらに出現する語彙を Rixon (1999)と同様の手法で分析し、5 社のうち 2 社以上のテキストに出現する語 1373 語をリスト化し、さらに、5 社全てのテキストに共通して出現する 267 語を明確にしたものである。こうしたテキストの使用普及率は定かではないので、確定的なことは言えないが、これらが、(『英語ノート』配布以前の段階においては）独自の英語テキストを開発することが叶わない多くの小学校で用いられているとするなら、このリストには、日本における英語活動で導入されている可能性の高い語彙がリスト化されていると言えるかもしれない[9]。

いずれのリストも、(本研究プロジェクトが発足・発展していた時点の 2005 年、2006 年では）ただ語が羅列しているのみで、語彙の考察に重要となる品詞や意味範疇などの記載もなく、ましてや、こうした語彙が使われる文脈や文構造など

[9] 『英語ノート』は、こうしたテキストより後に編纂されたわけであるから、これらのテキストが『英語ノート』編纂に影響を与えた可能性も少なからずあると思われる。

は全く与えられていない[10]。児童英語を考察するにあたって、かつ、第2節の②「児童英語の能力判定と評価」の観点からテスト作成の基盤となりえるリストという条件にも配慮すると、そうした語彙情報は不可欠なことから、また、これらの2つの語彙リストのソースが非常にかけ離れた観点からのものであり、どちらを採用するにしても、その位置づけが難しいことから、本研究プロジェクトでは、これらとは異なる観点を持ち、かつ、語彙と関わる情報（品詞や意味範疇、文脈）が取り出せる形での、語彙リストの開発の必要性を強く認識するに至った。

以下本節（3.1～3.5）では、町田他（2008）で報告した第2節の②「児童英語の能力判定テスト」作成の基盤となるリストの観点から開発した「KUIS 語彙リスト」の作成過程を概観し、石川（2006）および中條他（2006）のリストと比較して、その特徴を明らかにする。第4節以降は、第2節の①の観点から、「KUIS 語彙リスト」に改訂を加え、児童英語教育とその研究の全般に活用可能な汎用性の高い語彙リストとしての「KUIS 語彙リスト 500」の開発過程を報告する。

3.1 基本コーパス作成のための言語資料

「KUIS 語彙リスト」開発においては、基本となる語彙抽出のために、石川（2006）とも中條（2006）とも異なる観点を取り入れ、かつ、早期英語教育教材として「児童英語」教育にそれなりの裏付けが見られ、世界的にも広く使用されている *Let's Go* と *SuperKids* の二つのコースブックを語彙データ収集のための言語資料とすることとした[11]。これらは、前者が7レベル、後者が6レベルから構成され、このうち上位レ

---

[10] 石川の KUBEE1850 は改訂を重ねており、2010年1月の段階では、品詞情報や意味情報、JACET8000 との対応などが含まれたリストとなっている。

[11] 詳細は稿末の資料を参考のこと。

ベルは、平均的日本人児童には難度が高すぎると考えられたため、「KUIS 語彙リスト」開発のためには、日本で使用されている小学生用英語教材や実際の英語活動を参考にした上で、前者は最初の 5 つのレベル、後者は 4 つのレベルのみを対象資料とした。このリストには、各々の語彙の情報を含むことが重要なことから、リスト化の前の基礎作業として、コースブックの本文のみならず、タイトル・指導者が指示に使用する表現や語句、イラストに付された語句など、子どもが触れるであろう語を全て入力して、基本コーパスを作成した。そして、このコーパスに含まれる各語を（言語学・英語学の知見を取り入れ）一定基準に基づきレマ化作業を行った。

3.2 品詞・意味範疇の付与

レマ化作業を行うと共に、各語に対して品詞と意味範疇の付与を行った。品詞の識別は、コースブック内での用例から判断し、一般的な文法書などで広く用いられている分類を手作業で付与した。同じ語であっても複数の品詞を持つ場合は、品詞の違いによりその習得度は異なると指摘されている（Hindmarsh, 1980）ことから、異なり語として扱った。

また、意味範疇については、米国で 1993 年に開発された *MacArthur-Bates Communicative Development Inventories* の日本語版開発研究（小椋, 2000）の「ことばと身ぶり」「ことばと文」に示された語彙項目の分類枠組みと、『JACET 基本語 4000』（1993a）編纂の際、意味・機能分類として採用された（大学英語教育学会（JACET）教材研究委員会（編）, 1993b）*Longman Lexicon of Contemporary English*（1992）の 14 種の範疇双方を用いて、児童英語の語彙の分類を試みた。しかし、いずれの分類も早期英語教育の対象者である就学期児童にとっては必ずしも適当であるとは思えない分類が生じることが明らかとなった（町田他（2008）での討議参照）。その結果を

受け、「KUIS 語彙リスト」には、*Cambridge Young Learners English Tests Handbook*（2003）巻末のテーマ別語彙分類を参考にした上で、(児童英語のテストや教材開発への利用可能性を考慮し)、独自の意味範疇を設定した。各語には、品詞と共にこれらの意味範疇を付与したが、意味範疇情報の付与作業においても、コースブック内の用例に合わせ、品詞の付与同様、一つの語が複数の意味範疇を持つ場合は、それらを異なり語として扱うことにした。

3.3 第一次語彙選定と他の言語資料情報の入力作業

「KUIS 語彙リスト」開発は、その時点（2005～2007 年）では、語彙力を基本とした「児童英語能力判定テスト」の開発の基盤となること（第 2 節の②）を主たる目的として編纂したため、第一次語彙選定では、テスト項目となりうる語であることを考慮に入れると共に、第二言語教育（および外国語教育）における語彙習得の観点（Hindmarsh, 1980、山本, 2005、今井・針生, 2007）を参考に、名詞（固有名詞を含まず）・動詞・形容詞・副詞・前置詞の 5 品詞のみを抽出した。さらに、子どもが触れる可能性のある語彙すべてを基本コーパスとして抽出したものの、主に指導者が使用する語は、児童の習得語彙のテスト項目には不適当としてリスト作成には対象外とした。加えて、数学記号や数・アルファベットも同様にリストには含めなかった。

その後、第一次語彙選定過程を経た後のリスト（以下「基本コーパス 2」と称する）に、他の様々な観点からの言語資料[12]情報を加えた。これにより、それぞれの語の特性が明らかとなり、かつ言語資料間の比較が容易に行えるものとなった。

---

[12] 言語資料の詳細は、第 6 節で述べる。稿末の資料も参照のこと。

3.4 第二次語彙選定と先行研究による子ども用英語語彙リスト情報の入力作業

第二次語彙選定作業では、上記の過程を経た基本コーパス 2 に含まれる各語が、早期英語教育で導入される語彙として適切であるか否かを再度検討した。

この段階では、早期英語教育において概念を理解するのが困難、または、児童のための語彙テストの対象語彙としては不適切であろうと思われる上位語、抽象語を削除した。また、文化的な要素が色濃い語、子どもにとって馴染みの薄い動物の名前、日本人学習者にとっては異質と感じられる語も同様に削除した。削除作業は、他の言語資料の情報を十分考慮した上で行われ、最終的に 956 語を収録する語彙リストとなった。

この 956 語を収録する「KUIS 語彙リスト」には、さらに、上記でも触れた先行研究としての石川(2006)と中條他(2006)の語彙リストとの重複を調査し、重複している語にはこれらの情報を追加した。上述したように、石川（2006)、中條他（2006）で提示された語彙リストには、それぞれ異なる視点による言語資料を基に選定された語彙が収録されており、これらとの重複情報を加えることは、各語の特性をより明確にするものとなり、かつ、第 4 節以降で報告する汎用性のある語彙リストの開発に、重要な視点を提供することとなった。

3.5 「KUIS 語彙リスト」の特徴

「KUIS 語彙リスト」はエクセルで稼働する電子ファイルのリストであるが、それには、品詞や意味情報が付記されていることが、「語彙リスト」としては最も大きな特徴（長所）である。これにより、「KUIS 語彙リスト」に収録された品詞についての考察が可能となる。例えば、収録された 5 品詞の割合であるが、名詞 650 語（68.0%)、動詞 150 語（15.7%)、形

容詞 89 語（9.3%）、副詞 43 語（4.5%）、前置詞 24 語（2.5%）となっており、「児童英語」では名詞が大部分を占めていることが分かる。これは、母語習得においても名詞が最も早く習得される（小林・佐々木, 1999; 小椋, 2000; 小椋, 2007 など）という報告と同様の傾向となっており、L1 と L2 の習得研究の分野においても興味深い事実となろう。

さらに、「KUIS 語彙リスト」には、先行研究との比較対照が可能な形となるよう、石川（2006）、中條他（2006）、JACET8000（2003）などとの重複の有無が分かるような項目を付記してあるが、その特徴から、石川（2006）でのリストとの重複語は 542 語（56.7%）、中條他（2006）のリストとの重複語は 680 語（71.1%）であり、さらに 3 種の語彙リスト全てに出現する語彙数は 455 語（47.6%）であることが判明した。本稿末の（図 1）を参照されたい[13]。石川（2006）、中條他（2006）の語彙リストは異なる視点の言語資料を基に収集された語彙を含むものであるにもかかわらず、その約半数が 3 種の語彙リストに重複しているということが判明し、子どもにとって核となる語彙の姿が明らかになったと言えよう。

また、「KUIS 語彙リスト」と成人英語学習者向けの語彙リストである JACET8000（2003）との比較においては、約 4 割の語が JACET8000 の 1000 語レベルに、約 2 割が 2000 語レベルに含まれることから、KUIS 語彙リストの収録語彙の半数以上が基礎的な 2000 語レベル以内であることが分かる。一方

---

[13] 町田他（2008）言及した石川（2006）により提示されたリストは、品詞の付与がなされていないものであったが、注 10 でも述べたように石川リスト（KUBEE1850）は改訂が重ねられており、収録語彙に品詞が付与された。本稿では、町田他（2008）と異なり品詞の付与された石川リストとの重複度を産出したため（図 1）で示した重複語彙数には、町田他（2008）で（図 2）として報告した数からは変更が生じている。また、町田他（2008）で重複度を算出する際、KUIS 語彙リストでは、品詞・意味範疇が複数ある場合でも一語と算出したため総数を 898 語としたが、本稿では異なり語として算出をしたため総数は 956 語となった。そのため、重複割合についても、町田他（2008）と本稿では、数字に多少変更があることに注意されたい。

で、約2割の語はJACET8000の中にさえ含まれていないタイプの語であることから、選定された児童英語向けの語彙は、成人英語学習者にとって基礎的なレベルであり、共通するものが多いと同時に、異なる特質を持った語彙をも含んでいることが明らかとなった。つまり、児童英語で導入される語は中学校以降の英語では、必要とされないタイプの語をかなり含むのである。児童英語が中学校（およびそれ以降）の英語の単純な前倒しであってはならないことを示していると思われる。

4. 実践的英語語彙リスト「KUIS語彙リスト500」の開発に向けて

上述の通り、「KUIS語彙リスト」は、これまで開発された早期英語教育用語彙リストとは異なった視点を持つものとなったが、その開発時点（2005～2007年）においては、その主たる使用目的は、子ども用英語語彙テストの対象語となる語彙選定のためであった。そのため、第2節の①の目的（児童英語教育と研究のための汎用性の高い「語彙リスト」の構築）のためには、上記3.3と3.4での視点とは異なる観点からの語彙選定が必要であり、リスト項目を再検討した。

まず、語彙リストへの適正な収録語彙数であるが、児童英語教育において導入されるべき語彙数については、諸説あろうが、文科省により作成された『英語ノート』（指導資料）に出現する語彙のうち、児童に関わりが深いと思われる語彙が約650語（神谷他，2010）であることは参考となる。小学校高学年2年間（週1時間）程度で導入できる語彙数は、中学校レベル（週3時間3年間）でも現時点では900～1000語程度、新学習指導要領（週4時間3年間）でも1200～1300語程度であることを考慮するなら、「英語活動」に使われる総時間数の観点から500語以上の導入は想定できない。現実的には、

2年間で導入可能な語彙は300語程度が上限であろうが、第2節で述べたように、テキストやトピックにより導入される語彙には大きなバリエーションがあることを考慮すると、500語程度を「児童英語に基本的な語彙」とするのは妥当であろうと思われる。

次に、「KUIS語彙リスト」開発の第一次語彙選定の手順(上記 3.3) で述べたが、「KUIS 語彙リスト」には、主に指導者が使用し、児童が習得する語彙範疇には入らない語は削除(対象外と) されている。語彙リストに収録する語彙を、児童が習得を目指すものに限定するならば、この条件で十分であろうが、指導者による教材・カリキュラム開発や教室内活動に対しても活用可能な語彙をも含めた語彙リストとしては、これらの削除 (対象外と) されている語も含めて選定を見直す必要がある。

また、語彙リストに収集すべき品詞の種類についても考慮する必要があろう。子どもの語彙習得に関する先行研究によれば、名詞は動詞より早く、かつ容易に習得されることが報告され (Bates et al, 1995; 小椋, 2000; 小椋, 2007)、また形容詞・副詞・前置詞はその後習得されることも明らかにされている (今井、針生, 2007)。さらに、子どもの語彙発達の初期段階では、眼前事象を示す内容語を中心とした語彙の習得が顕著だが、その後、文法や談話を理解することも可能となり (McKay, 2006)、助動詞や接続詞といった機能語の習得が不可欠となる。こうした点を考慮すると、「KUIS語彙リスト」に収録された内容語中心の5品詞 (名詞、動詞、形容詞、副詞、前置詞) のみで十分とは言い難く、また、そうした品詞の位置づけも再検討する必要となった。

さらに、KUIS語彙リストでは、概念を理解するのが困難、もしくは児童に向けた語彙テストの対象語彙として不適切であろうとの観点から、上位語、抽象語を削除したが、年齢の

進んだ子どもは眼前事象から、見たり触れたりできない抽象語彙の学習が可能となる（Pinter, 2006）という観点から考えると、上位語、抽象語の収録についても再検討が必要である。

これらの観点を考慮し、「KUIS 語彙リスト」をより汎用性が高く、今後の英語活動に実践的に貢献する基盤となるようなリストとすることを目指して（つまり、第 2 節の①の目的のために）、新たな児童英語教育・研究用の「KUIS 語彙リスト 500」と称する語彙リストの開発を行った。以下、第 5 節では、その開発過程と特徴を述べ、第 6 節では、そのリストに付された言語情報の詳細を報告する。

5. 実践的英語語彙リスト「KUIS 語彙リスト 500」の開発過程

5.1 「KUIS 語彙リスト」からの改訂に向けて

5.1.1 収録語彙数の検討

子どもにとってどの程度の語彙数が適正であるかということは、先に述べた通り様々な議論があるが、『英語ノート』の児童向けの語彙が 600 語余りであることは示唆的である。また、（図 1）に示した「KUIS 語彙リスト」と先行研究（石川による KUBEE1850 と中條他（2006））との重複語彙の数が 455 語であること、つまり、児童英語向けに独立して異なった観点から開発された 3 つの語彙リスト全てに共通する語が 455 語であることも興味深い。この 455 語は、上述したように、「KUIS 語彙リスト」ではその基本コーパス作成のために、世界的に広く使用されているコースブックを採用したが、中條他（2006）では、中学校英語検定教科書出版社が出版している小学校英語テキストとその指導書を基本言語資料としている。また、石川（2006）では、英語のみならず日本語も対象言語とし、認識と産出の両側面を考慮した様々な言語資料

を使用している。このように、語彙選定のための基礎的な言語資料が異なるにもかかわらず共通して出現する語彙は、様々な側面を合わせ持っていると判断され、かつ早期英語教育における語彙の一定の方向性を示す、言わば核となる語彙であると考えられる。

こうしたことから、実践的な児童英語語彙リストには、この455語を基本語彙とし、これらの語に再検討された語を加える作業を行うこととし、500語程度をリスト化する方向で検討を重ねた。

5.1.2 指導者対象語彙の検討

「KUIS語彙リスト」は、子ども用英語語彙リスト開発のための基礎資料として開発され、テストの対象語を選定する目的ゆえに、子どもが習得するであろうと考えられる語彙のみを収録したことは先に述べたが、広く語彙リストが活用されるためには、指導者により使用される語彙をも収録することが必要である。

よって、「KUIS語彙リスト」作成の初期の段階で、主に指導者が使用するであろうと判断され考慮の対象外とされた約400語（異なり語数）を再度検証することとした。この再選定作業においては、後述するが「KUIS語彙リスト」に収録されている5品詞のみに限定せず、全品詞を対象として検証が行なわれた。

主に指導者が使用すると考えられたために削除（リスト対象外と）された約400語のうち、多くはないが、「KUIS語彙リスト」開発における第二次語彙選定での削除基準とした、文化的要素の色濃い語、外国語習得環境下では馴染みの薄い動物の名前、日本人学習者には異質と感じる語を削除した後、全てを先の455語に加えた。しかし、このうち約100語は既にKUIS語彙リストに収録されている語であったため、実際

に加えられた語は約 300 語に止まった。

5.1.3 収録品詞の検討

「KUIS 語彙リスト」は、その開発目的（児童に習得が可能という観点を重視したテスト開発用の語彙）ゆえに内容語を中心とした 5 品詞のみの収録に限定されていたが、文構築に深く関わり、言語活動を深化させるに不可欠な機能語（文法や文の他要素との関わりで文法的な側面を持つ語のクラス）が抜けていては、コミュニケーションも単語レベルの単純なものしか成立しない。長谷川（2007）は、早期英語教育において、単語のみでの発話でも、眼前事象に限られるならある程度のコミュニケーションが成立するとしながらも、このようなコミュニケーションは、より高度な英語技術へ、つまり読み書きにも通じうる総合的な英語力へと導くことが難しいことを指摘している（長谷川（2010）も参照)。確かに、子どもの言語習得は、眼前事象の理解から始まる（McKay, 2006）としても、年齢が進むにつれ抽象語彙の学習も不可欠となり、深化したより複雑な思考の伝達に関わる言語活動を目指すなら内容語だけでなく機能語の習得は避けて通れない。さらに、5.1.2 で述べた通り、指導者によるリストの活用も視野に入れる必要がある。こうしたことから、実践的語彙リストには、品詞は 5 品詞に限定せず、全ての品詞を対象とした。その結果得られた、数やアルファベットを除外した 5 品詞以外の品詞の異なり語数は、冠詞 3 語、代名詞 31 語、接続詞 8 語、助動詞 8 語、疑問詞 8 語、間投詞（会話表現を含む）28 語であった。これらの語も全て先の基本 455 語に加えた。

5.1.4 上位語・抽象語の検討

これらの語彙に関しては、公立小学校での英語活動必修化の対象学年が 5・6 年生であり、母語発達もある程度進んでいることから、Pinter（2006）にて報告されている子どもの語彙習

得特性に鑑み、新たな語彙リストには、上位語や抽象的概念を扱う語の収録も検討し、それらを基本 455 語に加えた。例えば、これまで削除されており、今回加えられた上位語には animal, color, shape など、抽象語には age, world, health などが挙げられる。いずれの語も教室内活動では多用されると思われる語であり、かつ指導者にとっても不可欠なものであると判断した。

5.2 語彙の再選定作業：「KUIS 語彙リスト 500」の構築

上記 5.1 で、約 1000 語からなる「KUIS 語彙リスト」を、児童英語教育の実践にも活用でき、小学校での「英語活動」だけでなく、中学校での英語教育およびそれ以降の英語教育を検討・考察するにあたっても示唆に富む「語彙リスト」にするために、語彙数を 500 語前後に限定すると共に、そうした語彙の重要度と関わる情報（他の児童用語彙リストや成人語彙リスト）にも考慮し、児童英語全般を見据えた語彙の選定を再度行った。それと同時に、リストを作成するにあたり、ただ闇雲に語彙をリスト化するのではなく、言語学的視点から、語彙のタイプを考慮した。いわゆる、内容語と機能語の違いの反映である。

5.2.1 語彙の機能による分類：内容語と機能語

言語の発達・習得は、言語技術や表現内容の深化を考慮するなら、外国語に限らず、母語においても一生続くと言える。特に、語彙については、母語であれ外国語であれ、膨大な量の語彙の習得が含まれ、新しい概念の導入や発明品の名付け、借用語の流入などを含め、語彙習得は一生継続されるものであり、教育といった環境要因は無視できない。ただ、この場合の「語彙」とは概して名詞や動詞、形容詞、（形容詞からの派生を含め）副詞といったいわゆる「内容語」（言語学的には「語彙範疇」）のことである。それ以外の品詞、つまり、助動

詞、前置詞、冠詞、接続詞、代名詞、数量詞などといったいわゆる「機能語」は数が限られ（それほど多くはない）、言語習得の初期の段階では、母語習得においても、出現しないことも稀ではなく、その意味・機能は判然としない。にもかかわらず、母語習得に限るなら、これらは、一度習得されたなら（それは5才迄にはほぼ終了すると思われるが）、生涯を通じてほとんど不変である[14]。こうしたことから、言語学の分野では、機能語と内容語は、ヒトの言語知識において全く異なる範疇に属し、内容語は「概念」「伝達内容」と関わるが、機能語は「文法」「伝達内容を支える形式」すなわち、文構築上のメカニズムと関わると考えられている。長谷川（2007）、長谷川（2010）では、言語を樹木にたとえるなら、これら2つのタイプの違いは、内容語は「木を飾る花や葉」、機能語は文法と共に「枝振りや幹、根」に相当すると述べている。樹木を美しくみせているのは、葉であり花であるかもしれない。また、豊かな葉や花があれば、根はもとより幹や枝も、その存在・機能が明らかではないかもしれない。しかし、葉や花を根や幹から切り離し寄せ集めても、樹木として成長することはできない。樹木は、文字通り、その根幹を担う根や幹があって初めて樹木となるのである。そして、樹木同様、言語も、語彙（内容語）が重要であることは疑いないが、そうした内容語を「文」に構造化させている「文法」と文法と関わる機能範疇の重要性は、強調され過ぎることはない。葉や花となる語彙・単語がなければ、文法や機能語という骨格だけでは面白みも美しさも感じられないのは道理である。しかし、

[14] つまり、母語の習得に関して言うなら、機能語と関わる言語知識は、経験的、帰納的な要因で左右されることが少ない非常に安定性の高い言語知識なのである。裏を返せば、機能範疇と関わる知識は、環境によって習得、獲得するものではなく、幼児に「生得的に存在する言語知識」であり、それが、認知的に「明示的に示す必要」が出た時点で「発現（獲得）」されると考えられる。近年の理論言語学においては、その「内在された言語知識とかかわる機能範疇」の解明にこそ、ヒトの言語の本質があると考えられている。

文法から切り離された内容語だけでは、その場、その瞬間には用が足せても、言語が担うことのできる複雑な思考や情報の蓄積、知的な論理的推論に耐えうるだけのヒトの総合的言語活動へとは繋がらないのである。

こうした「内容語」と「機能語」に関わる言語学的視点を考慮するなら、開発対象の「語彙リスト」にもその違いが反映されてしかるべきであろう。児童英語の段階で全ての「機能語」が導入されるわけではないが、その導入が言語の文法的側面と対応し、また、数が限られていることを考慮するなら、機能語は機能語としてリストしておく方が、指導上も研究の観点からも利便性も大きく有用性も高い。そして、内容語は、扱うトピックに応じて異なり、その多様化や進化に比例して増えることから、語彙の数はむしろ「内容語」中心に考えられるべきであると考える[15]。

「内容語」と「機能語」を分けて考えることは、以下の早期英語教育研究者（McKay, 2006）からの指摘とも呼応する。早期英語教育においては、語彙知識の発達が言語能力の発達に不可欠で、コミュニカティブな言語能力全ての構成要素は語彙知識の増加に依存しており、眼前事象での理解ができる年齢以上になると、文法・談話に関しての理解も可能となるとのことだが、これは、導入初期では最も基本的な伝達が内容語中心になされ、より高度に正確な伝達や談話の理解のためには「機能語」を含めた文法の習得が不可欠であることを示していよう。

語彙を「内容語」と「機能語」に分割してリスト化するこ

[15] 近年、コンピュータの発達に伴い、大量のデータを扱った検索や統計処理が可能になったことから、語彙に関わる研究は非常に盛んであり、様々なコーパスや語彙のリストの構築も為されている。しかし、残念ながら、その多くは、こうした言語学的観点からは大きな違いのある「内容語」と「機能語」に関しての言及もなければ、それらの観点からの分析、考察もほとんどない。その意味においても、本研究で提示する「KUIS 語

とには、児童の習得段階に応じて語彙を選択できるという利点がある。また、指導者が利用する際には、教材・カリキュラム・教室内活動で取り上げられる話題に応じて導入する語彙は内容語から、教室内での質問、指示、説明などに使用する語彙は機能語のリストも併せて考慮するというように、状況に応じてリストを使い分けることができるという利点もある。

こうしたことから、新たな実践的語彙リストは、これまでのリストから前置詞や代名詞、助動詞などを「機能語」として独立リストにし、その他の語、つまり、名詞、動詞、形容詞、副詞の 4 品詞からなる「内容語」のリストとは別にした。以下では、各々のリストの「KUIS 語彙リスト」からの改訂について簡単に述べる。

5.2.2 「内容語」語彙リスト:「KUIS 語彙リスト 500」[16]

4 品詞のみを含む内容語語彙リストの語彙選定のために、（図 1）で得られた 455 語に加えて 5.1.2、5.1.3、5.1.4 の作業を通して、再度リストへの収録の候補となった語彙は、KUIS 語彙リスト 956 語の中から 455 語を選定した際と同様の基準により行われた。つまり、先行研究である石川（2006）、中條他（2006）で提示されたリストの双方に収録されていることを条件に選定を行った。この条件を満たすことで、この作業にて選定される語は、先の 455 語と同様の基準を保持することとなった。但し、基本とした 455 語には前置詞が 14 語含まれており、これらの語は「新語彙リスト」では機能語リストに収録すべき語であるため、内容語の基本となった語は 441 語である。これらに石川（2006）、中條他（2006）に重複して

彙リスト 500」は、語彙リストの新たな言語学の視点を生かした取り組みであり、今後の語彙研究にも一石を投じるものとなろう。

[16] 以下、5.3 および第 6 節で述べるが、内容語リストは大別して 3 種の言語資料が付され、エクセルの画面で 3 種が一見できる形となっている。

出現する 50 語を加え、「内容語リスト」に収録される語彙は 491 語となった。この数字を概算し、このリストを「KUIS 語彙リスト 500」と名付けた。

これらの各語には、「KUIS 語彙リスト」に収録されたものと同様の言語情報を加え、各語の特性を明らかにすると共に、言語情報間の比較が行える形を維持した。言語情報のうち、中学英語教科書での情報に関しては、最新の情報を東京都中学英語教育研究会研究部のホームページ（http: www.eigo.org/kenkyu/index.htm）から入手した。「KUIS 語彙リスト」では検定英語教科書 7 種の情報を加えていたが、新たな語彙リストには平成 18 年度（2006 年）から使用されている 6 種の検定英語教科書[17]での新出学年情報と出現度を言語情報として採用した。

5.2.3 「機能語」語彙リスト:「KUIS 語彙リスト 500」の付録として

汎用性の高い語彙リスト開発を目指し、5.2.1 で述べたように新たに「機能語」のリストを作成した。そこには、「KUIS 語彙リスト」に収録されていた前置詞 14 語と 5.1.2、5.1.3 で述べた過程により抽出した語（新たな前置詞 3 語）とを併せて語彙選定作業を行った。また、「KUIS 語彙リスト」においては形容詞として分類されたものの、その意味が抽象的であり、児童向けのテスト項目とするのは不適切と判断し考察の対象外としていた many, same, each などの語を、「限定形容詞（determiner-adjective; det-adj）」として分類し「機能語リスト」に収録することとした。これらの語の品詞分類は、内容語のようには簡単ではなく、言語学者、英語学者によっても、分析の目的や定義によって、一様ではない。

「機能語リスト」は、内容語のように石川（2006）、中條他

[17] これらの詳細については 6.1.1 中の中学教科書の部分を参考にされたい。

(2006) に共通して現れるか否かという基準ではなく、その機能と使用される構文の導入やその難易度などを言語学の観点も用いて、総合的に判断し選定した。

また、「機能語リスト」に間投詞や定型表現を含むのは適当か否か議論のあるところだが、数が限定していること、特定の談話的表現の導入となること、などから便宜的に「機能語リスト」に含めた。そうした間投詞のうち、子どもにとって馴染みが薄いと思われる数語については、「KUIS 語彙リスト」での選定基準に倣って削除した。

この結果、「機能語リスト」収録語彙として選定された語彙総数は 114 語となり、これは、「KUIS 語彙リスト 500」の付録リストとした。

5.3 実践的英語語彙リスト「KUIS 語彙リスト 500」＋機能語リストの特徴

上記の開発過程、改訂過程を経て得られた「KUIS 語彙リスト 500」およびその「機能語リスト」が、これまでの語彙リスト(「KUIS 語彙リスト」および、石川(2006)、中條他(2006)、JACET8000 (2003) など) と大きく異なる点は、前述の通り、リストを内容語と機能語に分類したことである。

さらに、内容語には各語の特性が明らかとなるように、様々な言語資料による情報を「KUIS 語彙リスト」同様加えてあり、その点でも特徴的である。付記された語彙関係の情報は、エクセルで稼働するリスト上で一覧することが可能であり、大きく分類すると次の 3 種の情報を含んでいる。

第 1 のタイプの語彙情報は、「A : 語の基本情報と日本における英語教育との関連情報」であるが、「語の基本情報」として、語のリスト (レマ化リストも併記) に各々の語の品詞と意味範疇が明示してあり、日本の英語教育の関連では、『英語ノート』で出現する語彙か否か、中学校で導入対象となって

いるか否か（中学検定英語教科書の教科書別新出学年並びに6種の教科書での出現度）が、一目で分かるようになっている。以下6.1.1でより詳しく述べる。

第2に、「B：語彙研究・教材との関連情報」で、早期英語教育の先行研究を含む、語彙研究との関連情報と子ども用教材からの情報[18]（Nationのレンジ、BNC、石川リストランク、中條リストレンジ、アルク2000語絵じてん）を記載している。

第3の情報は「C：基本コーパス・意味範疇の言語資料情報」で、そこには、「KUIS語彙リスト」開発のための基本コーパス作成に用いた基礎的言語資料情報[19]（*Let's Go* と *SuperKids*）と意味範疇設定に参考とした子ども用テスト情報[20]（*Cambridge Young Learners English Tests Handbook*）が記載してある。

「機能語リスト」は、上述のように、文法事項や導入する文のタイプと関連することから、他の語彙リストなどとの関連情報は付記していない。付記したのは品詞的な情報だけであるが、これらは中学校以降でどのように導入されるかを検討することにより、児童英語の英語とそれ以降の英語の文法構文的な考察が可能となろう。

6.「KUIS語彙リスト500」（＋機能語リスト）に付与された情報

6.1 言語情報詳細

「KUIS語彙リスト500」およびその付録である「機能語リスト」は、小学校での「英語活動」を円滑かつ有意義なものとするために、また、児童英語関係の研究の基礎資料として、様々な目的に応じて利用が可能であると思われる。本リスト

---

[18] 詳細は、6.1.1に述べる。

[19] 詳細は稿末の言語資料もしくは参照文献に掲載。

[20] 脚注19に同じ。

の特徴をより明確に把握し、その長所を生かした利用に照らし、以下では、このリストの各語彙に付けられている言語情報を説明する。

6.1.1 内容語リスト言語情報詳細

まず、内容語リストのそれぞれのラベル（言語情報源を示す）を以下に説明する。内容語リストはその情報のタイプの違いにより 3 種に分割（A、B、C）でき、各々に含まれるラベルの詳細は以下の通りである。

A：語の基本情報と日本における英語教育との関連情報

・ POS（Part of Speech; 品詞情報）

POS は、Part of speech（品詞）の略で、品詞区分は、基本的には、一般的な文法書などで広く用いられている分類を採用した。なお、語彙リスト中では省略した表記を使用しており、（表 1）に品詞と対応する省略形を記載した。また、各語の品詞は、基本コーパス作成に用いた言語資料としたコースブック（*Let's Go* と *SuperKids*）での使用例に基づき付与してある。

・ Flag（意味情報）

Flag は、各語の意味範疇を示しており、意味範疇の設定過程は、町田他（2008）に詳細が述べられているが、小学校での英語活動対象者の感覚に適するよう本研究で独自に設定されたものである。この意味範疇も品詞付与作業と同様、コースブック（*Let's Go* と *SuperKids*）での使用例に基づき付与されている。意味範疇は、複数の意味タイプにわたる語彙には、Flag も複数用意し Flag 1 だけでなく Flag 2 も用いている。各 Flag ともに、下位区分のあるものは Flag 内の SUB に明記してある。これらの分類は（表 2）に示した。

・ **英語ノート**

文部科学省が、2009年に作成した小学校英語活動のための参考教材『英語ノート』の指導資料に該当語彙が出現するか否かを掲載している。出現語彙には○を付し、出現していない場合は＊を付している。

『英語ノート』指導資料の出現語彙は、神谷他（2010）にて抽出された約650語を対象としており、この約650語は全英文の中から、「扱う表現」「CDスクリプト」「児童の活動」に出現したもののみを対象としており、担任やALT（のみ）が使用するであろう文や表現は除外している。

・ **中学教科書（中学校検定教科書との関連）**

平成18年度から使用されている6種の検定英語教科書の中での該当語の新出学年と6種の教科書中何種に出現したかを掲載している。この情報は、東京都中学英語教育研究会研究部によりまとめられた語彙リストを基とした。6種のテキストに出現している語彙は、東京都中学英語教育研究会研究部のホームページ（http:// www.eigo.org/kenkyu/index.htm）にて入手可能である。

本情報についても、6種いずれの教科書にも出現していない場合は、＊を付してある。

6種の検定英語教科書詳細[21]は以下の通りである。

Columbus 21（1年～3年）（2006）　東京：光村図書
New Crown　（1年～3年）（2006）東京：三省堂
New Horizon　（1年～3年）（2006）東京：東京書籍
One World（1年～3年）（2006）東京：教育出版
Sunshine（1年～3年）（2006）東京：開隆堂
Total　（1年～3年）（2006）東京：学校図書

[21] これらの言語資料は、中学英語教育研究会により使用された言語資料のため、本稿の参照文献には再掲しない。

・ JACET（JACET8000 リスト(2003)との関連）

大学英語教育学会（JACET）基本語改定委員会（編）により提示された JACET8000 リスト（2003）の収録語彙に付されたランクを基に、ランク 1～999 は 1、1000～1999 は 2 として 1～8 の数字を付与した。数字が小さいほど基本語彙であることを示し、JACET8000 に収録されていない語については＊を付してある。

JACET8000 は、BNC（後述参照）を基準スケールとした上で、日本の英語教育の現状を反映した言語資料と米語を比較的多く含んだ言語資料を基に委員会が独自に作成したサブコーパスをからめて言語処理された語彙リストである。

対象者は、日本人学習者全て、つまり小学校から一般社会人までの広い層であるとされているが、大学生が使用する場合には、中高での語彙の復習から時事的用語の習得にまで活用できるリストである。

B：語彙研究・教材との関連情報

・ NATION/RANGE

ビクトリア大学の Paul Nation 教授により開発された語彙分析ソフト RANGE により得た情報を付している。RANGE は、A General Service List of English Words （West, 1953）[22]や The Academic Word List （Coxhead, 1998, 2000）[23]などの語彙頻度情報を参考にした言語資料により、該当語の頻度を示すものである。頻度情報は 1～3 で示され、1 は、最も頻度の高い 1000 語、2 は次の 1000 語、3 は

---

[22] 詳細は West, Michael. (1953) *A General Service List of English Words*. London: Longman. を参照されたい。RANGE 開発の際に用いられた資料のため、本稿の参照文献には掲載しない。

[23] 詳細は Coxhead, A.J. (1998). An Academic Word List. *English Language Institute Occasional Publication Number* 18. Wellington: Victoria University of Wellington 並びに Coxhead, A.J. (2000). A new academic word list. *TESOL Quarterly*, 34, 213-238.にある。これも RANGE 開発の際に用いられた資料のため、本稿の参照文献には掲載しない。

1、2のどちらにも該当しないが、高等学校・大学等のテキストに頻出する語に該当することを示す。つまり、RANGE によって得た情報は、複数の横断的資料から検索し、該当語がどの位の範囲で使用されているかを提示するもので、それぞれの数字により各語の頻度を基礎とした特性を知るこができる。

RANGE のプログラムは Nation 教授のビクトリア大学ホームページから入手可能である
(http://www.victoria.ac.nz/lals/staff/paul-nation.aspx)。

・ BNC

BNC とは、The British National Corpus の略語であり、このコーパスはイギリス英語の書き言葉・話し言葉双方を集めた1億語からなる世界最大のコーパスである。収録語彙の詳細は、書き言葉が9割を占め、新聞・専門雑誌類・学術書など様々な資料から収集されている。話し言葉は約1割であるが、様々な年代・地域・階層の人々の日常会話から収録されたものである。

BNC では 3 種の情報が得られ、Rank はコーパス内での使用頻度が高いほど小さな数字で表される。Freq.は Frequency、つまり頻度のことであり、コーパス内での使用頻度を示すものである。使用頻度が高いほど、Freq.に表される数字は大きくなる。また、Range は上記の言語資料のうちどの程度の範囲に該当語が出現するかを示した数字で、100 を上限として表されている。

BNC は http://www.corpora.jp/~scn/bnc.html?page=top から入会が可能であり、また http://www.natcorp.ox.ac.uk/getting/では CD-ROM 版が購入できる。

・ 石川

石川（2006）で報告された語彙リスト（KUBEE 1850）のランクを記載している。本リストは、小学校英語教育のための基本語彙として編纂され、その言語資料は認識語彙・産出語彙の両側面に渡っていると共に、英語のみならず日本語をも対象言語としている。ランクはコーパス言語学の手法を用い、使用頻度により設定されたものであり、数字が小さいほど使用頻度が高い語であることを示している。KUBEE 1850は http://www11.ocn.ne.jp/~iskwshin/kubee.html にてダウンロードが可能である。

・ 中條

中條他（2006）で言語資料とした国内の英語教科書出版社5社から出版されたテキスト計14冊とそれらの教師用指導書のうち、何社のテキストに出現しているか（中條他（2006）ではレンジと称している。）を記載している。但し、中條他（2006）では2社以上に出現した語彙のみをリスト化しているため、付与された数字は2～5のいずれかである。数字が大きいほど出現度が高いことを意味する。

テキストと教師用指導書の詳細は以下の通りである。[24]

Let's Have Fun! 1年～6年 (2003). 開隆堂：東京

Let's Have Fun! 指導の手引き 1年～6年 (2003). 開隆堂：東京

JUNIOR COLUMBUS 21 BOOK 1・2 (2004). 光村図書：東京

JUNIOR COLUMBUS 21 教師用指導書 BOOK1・2 (2004). 光村図書：東京

Junior Horizon Hi, English! BOOK 1・2 (2003). 東京書籍：東京

[24] 中條他（2006）にて使用された言語資料のため、本稿の参照文献には掲載しない。

Junior Horizon Hi, English! BOOK 1・2 (2004). 東京書籍：東京

ONE WORLD Kids バード・アント(2001). 教育出版：東京

ONE WORLD Kids 教師用指導書バード・アント(2001). 教育出版：東京

KIDS CROWN スタンダード・アドバンスト(2004). 三省堂：東京

KIDS CROWN 教師用指導書スタンダードコース・アドバンストコース (2004). 三省堂：東京

・ **アルク**

『アルク 2000 語絵じてん』(2000)) の巻末語彙リストに収録されている語彙情報を掲載したもので、数字は絵辞典の出現頻度を示し、収録されていない場合には＊を付した。

この絵辞典は、場面設定をした大きな絵に、文字も付された該当語を絵で表している辞典である。早期英語教育のパイオニア的存在である久埜百合氏が著者であり、広く実際の教育分野で利用されている。

C：基本コーパス・意味範疇の言語資料情報

・ **Longman**

Longman の欄で示された数字は、*SuperKids* (New ed.) Level1-Level 4. (2005)) に出現する語彙の頻度情報であり、1～4 はそれぞれレベルを示すもので、各レベル欄の数字で、どのレベルにどの位該当語が何回使用されていたか、また total 欄でコースブック全体（但し対象レベルのみ）での頻度が判別できる。これにより、語の難しさがある程度推測可能である。また、必ずしもではないが、馴染みがそれほどある語ではないのにもかかわらず、出現頻度が高い語はチャンツとして使用されている可能性を秘めているので、本コースブ

ック内での活動内容を予測できる場合もある。

また Oxford の情報と比較することで、コースブックによって使用される語の違いや出現するレベルの違いを比較することも可能である。

・ Oxford

Oxford の欄で示された数字は、*Let's Go* (2nd ed.) Starter-Level 4. (2000)) に出現する語彙の頻度であり、0～4 (0 は Starter を示す。) はレベルを示している。その他の詳細は Longman と同様である。

・ Cam.

University of Cambridge ESOL Examinations により開発・実施されている Young Learners English Tests のための *Cambridge Young Learners English Tests Handbook* (2003) の巻末語彙リストに付与されているテストのレベルを掲載したものである。

このテストは Starters, Flyers, Movers の 3 レベルから成っており、7 歳から 12 歳の児童を対象者としている。それぞれのレベルは Council of Europe の Common European Framework の言語参考レベルによって明示されており、Starters は A1 レベル以下、Flyers は A1 レベル、Movers は A2 レベルとされている。

6.1.2 「機能語リスト」言語情報詳細

機能語リストのラベルは POS (品詞分類情報) のみである。

・ POS

POS は 6.1.1 で示したように品詞を示すが、機能語リストでの品詞区分は内容語リストの品詞区分とはやや異なり、広く用いられている分類と言語学的な観点からの分類とを併せて付与している。内容語リストの品詞区分と同様に、省略形

と品詞を（表 3）に示す。このうち FS（Formulaic Sequences）とは定型表現のことを意味し、ここでは FS を see you のような会話表現と wow のような間投詞とに分類している。なお、5.2.3 でも触れたが、FS を「機能語」とすることには多少の抵抗があるが、数が限られていること、特定の環境でしか出現しないことなど、内容語ほどの自由度がないことから、便宜的に「機能語リスト」に記載した。

7. おわりに

本稿では、神田外語大学 CLS において 2004 年より遂行してきた「早期英語教育プロジェクト」の一環として開発してきた児童英語教育および研究のための語彙リストの開発過程を明らかにし、最終的に編纂した「KUIS 語彙リスト 500」の全容を紹介した。このリストは、単に児童英語教育や小学校での「英語活動」で導入される可能性の高い語のリストを提示するに留まらず、各々の語彙の品詞や意味に関わる情報を提示し、さらに、その語が、児童英語分野（「英語ノート」、他の児童英語リスト、*Let's Go* や *SuperKids* といったコースブック、ケンブリッジ児童英語テストのレベル）やそれ以降の英語（中学校検定教科書、大学生を含めた成人向け語彙リスト）、および英語母語話者と関わる情報（BNC、Nation の頻度）に照らし、どのように位置づけられるかなどが、一目で把握できるものである。

このリストは、他の一般的なリスト（児童英語向けの石川（2006）、中條他（2006）だけでなく、JACET8000（2003）や BNC など、多くのリスト）と異なり、言語学的な視点から、内容語と機能語を分けてリスト化した。こうすることにより、英語教育で導入される語彙が「内容の伝達・把握」との関係で必要とされるのか、「文法や文の機能」の観点から求められるのかが明らかとなり、児童英語と中学校英語以降の英語の

つながりも、内容語と文法につながる機能語の両面から検討・考察することが可能となる。本研究で提示した語彙リストの形態は、これまでにない新しいタイプとして、今後の語彙研究にも一石を投じるものとなろう。

参照文献 (英語の文献と日本語の文献は分けてあるが、すべてアルファベット順で列記)

Bates, E., Dale, S. P., & Thal, D. (1995). Individual Differences and their Implications for Theories of Language Development. In Fretcher, P. & MacWhinney, B. (ed.), *The handbook of child language*. pp. 96-151. Cambridge: Blackwell.

Cameron, L. (2001). *Teaching Language to Young Learners*. Cambridge: Cambridge University Press.

Folse, K. (2004). *Vocabulary Myths*. Ann Arbor, MI: the University of Michigan Press.

Hindmarsh, R. (1980). *Cambridge English Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.

Let's Go (2nd ed.) Starter-Level 4. (2000). New York: Oxford University Press.

McArthur, T. (1992). *Longman Lexicon of Contemporary English*. Essex: Longman.

McKay, P. (2006). *Assessing Young Language Learners*. Cambridge: Cambridge University Press.

Nation, P. (1990). *Teaching and Learning Vocabulary*. Massachusetts: Heinle & Heinle Publishers.

Nation, P. (2003). *Range Programme and the GSL and AWL Lists*. Retrieved Sep 3, 2009 from Victoria University of Wellington, the School of Linguistics and Applied Language Studies Web

site: http://www.victoria.ac.nz/lals/staff/paul-nation/nation.aspx

Oxford University Computing Service. *British National Corpus*. Oxford: University of Oxford.

Pinter, A. (2006). *Teaching Young Language Learners*. New York: Oxford University Press.

Rixon, S. (1999). Where Do the Words in EYL Textbooks Come From? In Rixon, S. (Ed.), *Young Learners of English: Some Research Perspectives*, pp.55-71. Essex: Pearson.

Read, J. (2000). *Assessing Vocabulary*. Cambridge: Cambridge University Press.

SuperKids (New ed.) Level1-Level 4. (2005). Hong Kong: Longman.

University of Cambridge ESOL Examinations. (2003). *Cambridge Young Learners English Tests Handbook*. Cambridge: University of Cambridge ESOL Examinations.

中條清美, 西垣知佳子, 西岡菜穂子, 山﨑淳史, 白井篤義 (2006). 「小学校英語活動用テキストの語彙」『日本大学生産工学部研究報告 B』39, pp. 79-109. 日本大学.

大学英語教育学会（JACET）教材研究委員会（編）(1993a). 改訂 3 版『JACET 基本語 4000』(JACET 4000 BASIC WORDS) 東京：大学英語教育学会（JACET）.

大学英語教育学会（JACET）教材研究委員会（編）(1993b). 『「JACET 基本 4000」における語彙選定の基準と手順』東京：大学英語教育学会（JACET）.

大学英語教育学会(JACET) 基本語改定委員会（編）(2003).『大学英語教育学会基本語リスト(JACET List of 8000 Basic Words)』東京：大学英語教育学会（JACET）.

長谷川信子 (2007).「早期英語教育における文法と母語の役割」小林美代子（編）『「早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究(3)」平成 16 年～18 年科学研究費補助金(基盤研究(B)研究報告書)』pp. 209-226. 神

田外語大学.
長谷川信子(2010).「小学校英語とはどういう英語か？－児童英語教育でできるようになること、できないこと－」『言語科学研究』16, pp. 11-31, 神田外語大学大学院紀要
長谷川信子、神谷昇、町田なほみ、長谷部郁子(2009).「小学校英語活動における「英語のカタチ」―『英語ノート』出現語彙の分析結果から―」第 9 回小学校英語教育学会東京大会（於東京学芸大学）口頭発表、2009 年 7 月 19 日
長谷川信子、町田なほみ (2010).「子どもの言語力を探る：英語語彙テストと日本語語彙能力テストの結果から」*Scientific Approaches to Language* 9. pp.191-213. 神田外語大学.（本号に収録）
石川慎一郎 (2006).「小学校英語教育のための語彙選定の視点：L1/L2 コーパスに基づく発信型語彙表の開発」全国英語教育学会第 32 回高知研究大会（於高知大学）口頭発表, 2006 年 8 月 6 日
今井むつみ, 針生悦子 (2007).『レキシコンの構築－子どもはどのように語と概念を学んでいくのか』東京：岩波書店.
神谷昇、長谷川信子、町田なほみ、長谷部郁子 (2009).「『英語ノート(試作版)』の語彙の特徴－品詞と意味の観点から－」*Scientific Approaches to Language* 8, pp.119-145. 神田外語大学.
神谷昇、長谷川信子、町田なほみ、長谷部郁子 (2010).「『英語ノート』における品詞割合と動詞の種類」*Scientific Approaches to Language* 9. pp.233-258. 神田外語大学.（本号に収録）
小林春美, 佐々木正人（編）(1999).『子どもたちの言語獲得』東京：大修館書店.
小林美代子、長谷川信子、町田なほみ (2008).「子どもの英語力を測る：語彙テスト開発の試み」日本言語テスト学会第 12

回全国研究大会（於常磐大学）口頭発表、2008 年 9 月 14 日

小林美代子 (2010).「子どもの英語力を測る：語彙テスト開発の試み」*Scientific Approaches to Language* 9. pp.259-278. 神田外語大学.（本号に収録）

久埜百合(2000).『アルク 2000 語絵じてん』東京：アルク.

町田なほみ、小林美代子、長谷川信子 (2008).「早期英語教育のための語彙リスト開発過程」*Scientific Approaches to Language* 7, pp. 241-268. 神田外語大学.

文部科学省 (2008).『小学校学習指導要領』（平成 20 年 3 月）http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm

文部科学省 (2008).『中学校学習指導要領』（平成 20 年 3 月）http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm

文部科学省 (2009).『「英語ノート」1/2　指導資料』.

小椋たみ子 (2000).「マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の標準化」『平成 10 年度～11 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書』神戸大学.

小椋たみこ (2007).「日本の子どもの初期の語彙発達」『言語研究』132, pp. 29-52.

東京都中学英語教育研究会研究部. http://www.eigo.org/kenkyu/index.htm（2009 年 10 月 15 日アクセス）

山本麻子 (2005).『子どもの英語学習－習得過程のプロトタイプ－』東京：風間書房.

資 料

コーパス作成のための言語資料

●基本コーパス作成のための言語資料

Let's Go (2nd ed.) Starter-Level 4. (2000). New York: Oxford University Press.

SuperKids (New ed.) Level1-Level 4. (2005). Hong Kong: Longman.

●その他の言語資料

・海外早期英語教育教材

University of Cambridge ESOL Examinations. (2003). *Cambridge Young Learners English Tests Handbook.* Cambridge: University of Cambridge ESOL Examinations.

・海外成人英語資料

Oxford University Computing Service. *British National Corpus.* Oxford: University of Oxford.

Nation, P. (2003). *Range Programme and the GSL and AWL Lists.* Retrieved Nov 25, 2009 from Victoria University of Wellington, the School of Linguistics and Applied Language Studies Web site:http://www.victoria.ac.nz/lals/staff/paul-nation/nation.aspx

・国内早期英語教育教材

久埜百合(2000).『アルク 2000 語絵じてん』東京：アルク

・国内中学校用検定英語教科書

Columbus 21（1 年～3 年）（2005） 東京：光村図書

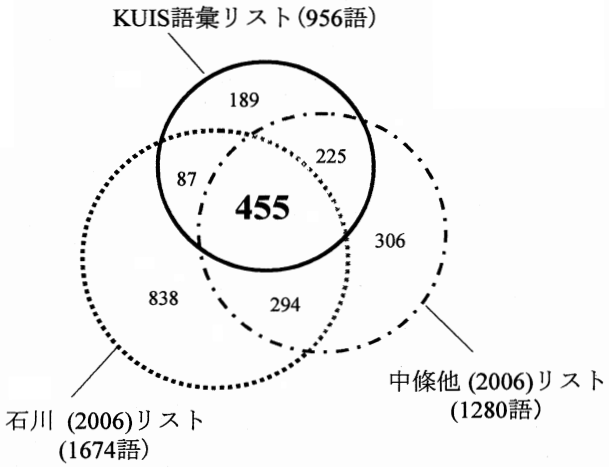
New Crown （1 年～3 年）（2006）東京：三省堂

New Horizon （1 年～3 年）（2006） 東京：東京書籍
One World（1 年～3 年）（2006） 東京：教育出版
Sunshine（1 年～3 年）（2006） 東京：開隆堂
Total （1 年～3 年）（2005） 東京：学校図書
Total active.comm（1 年～3 年）（2004） 東京：秀文堂

・国内成人英語教育教材

大学英語教育学会(JACET) 基本語改定委員会（編）（2003）.『大学英語教育学会基本語リスト（JACET 8000)』東京：大学英語教育学会（JACET）

（図 1）石川 (2006)リスト、中條他 (2006)リスト、「KUIS 語彙リスト」の比較



注：石川 (2006)および中條他 (2006)の語彙リストは、KUIS 語彙リストで削除した品詞を含んでいる。同条件での重複度算出のために KUIS 語彙リストで削除した品詞に当たる語を両リストから削除すると、それぞれ 1674 語、1280 語となった。但し、中條他（2006）には品詞の付与がないため、妥当と思われる品詞を推測した上で本作業を行った。

（表 1）「KUIS 語彙リスト」「KUIS 語彙リスト 500」における品詞区分

省略形	品詞
n	noun（名詞）
v	verb（動詞）
adj	adjective（形容詞）
adv	adverb（副詞）

（表 2）「KUIS 語彙リスト」「KUIS 語彙リスト 500」における Flag 一覧

MAIN	SUB
GENARAL	
ANIMAL	
	PARTS
VIHICLE	
TOY	
SCHOOL	
FOOD/DRINK	FOOD
	FRUIT
	SWEET
	DRINK
CLOTHING	
	ATTACHMENT
	ACCESSORY
BODY	
BELONGINGS	
HOUSE	FURNITURE
	ELECTRIC
	ROOM
	INSTRUMENT
	KITCHEN
	OTHERS
LEISURE	
NATURE	
TOWN	
PARK	
ACTIVITY	
PEOPLE	
	FAMILY
DAILY LIFE	
SPORTS	
	GOODS
	OTHERS

MAIN	SUB
VERB	ACTIVITY
	ACCOMPLISHMENT
	ACHIVEMENT
	STATE
	OTHERS
TIME	HOUR
	DAY
	MONTH
	SEASON
	EVENT
	OTHERS
APPEARENCE	
DESCRIPTIVE	
FEELING	
QUALITY	
SCALE	
TASTE	
WEATHER	
OTHERS	
COLOR	
PREPOSITION	
ADVERB	
QUANTITY	
ABSTRACT	POSITION
	SHAPE
	UNIT
	MEASUREMENT
	OTHERS
HEALTH	
MISCELLANEOUS	

（表 3）「KUIS 語彙リスト 500」の「機能語リスト」における分類

省略形	品詞
beV	be-verb
conj	conjunction
det	determiner
det-adj	determiner-adjective
FS-conv	Formulaic Sequences-conversation
FS-intJ	Formulaic Sequences-interjection
intG	interrogative
ml	modal
to-inf	to-infinitive
prep	preposition
pron	pronoun

（長谷川）
261-0014
千葉市美浜区若葉 1－4－1
神田外語大学
大学院言語科学研究科
hasegawa@kanda.kuis.ac.jp

（町田）
神田外語大学
言語科学研究センター
nahomijp@kanda.kuis.ac.jp